

南海に於ける大乘王國

三佛齊とその佛教文化 (一)

基礎研究 藤井周慶

目次

一、地名の檢索

BA 文獻による檢索
B 地理的檢索

二、王名の檢索

三、外國との交渉

三佛齊とは室利佛逝又は尸利佛誓とて現今のバレムバン港附近を中心として西紀七世紀後半より十四世紀末頃まで南海に活躍した一王國の名稱である。そして彼の國が自ら海路東西交通要衝の地利を以て政治通商其他あらゆる方面に於て印度・支那文化の交渉に最も貢獻せる點は、(註一)固より、その主權者 Calendra 朝が我が佛教特に大乘の忠實なる遵奉者としてその文化光被に努力したことに對して吾人はまた一層の關心を覺ゆるものである。さればその佛教流傳史上の役目は、たとひ粟散邊洲の地到底新疆乃至トルキスタンの曠荒に比すべきもなく、はた自然の暴威は文献學考古學等によつて提供さるべき直接史料を散佚せしめて之れが考究の上に超え難い限界を構へてをるとは言へ、かの西域に於けると同等であると思ふ。然るにすべて南海古代に於ける文化特に佛教の體系は少く

とも現在の學界に於ては未知數に屬してゐると言ふも敢て誇稱ではない。顧へば既往十數年蘭佛等幾多學者の手によつて碑銘乃至美術に關する權威ある論文の發表さるゝあり、その研究漸く緒に就かんとするも、寧ろ組織的な文化史的成果に接するは猶幾許の過程を経なくてはならぬであらう。故に今此等の斷續的な先蹤を辿りつゝその佛教文化の一端を窺ふこととする。

一、地名の檢索

A 文獻による檢索

a. 舍利毘逝 太平寰宇記四夷傳 (文獻に出づる年紀) 第七世紀

Crivijaya kota kapur 碑銘 六八六頃

vien Sa 碑銘 七七五

尼波羅寫本 第十一世紀

Crivijaya タミール碑銘 (ライデン大憲章中) 一〇〇五

タンジョール碑銘 一〇三〇

b. 師利佛逝(誓) 義淨兩傳及白一羯磨注 六七一

尸利佛誓 唐會要 六九五

南海に於ける大乘王國三佛齊とその佛教文化 六五七 六九

冊府元龜九六四等

七〇二—七四一

六五八

Sribuza

Abū Zayd (舊唐書南蠻傳)

九一六

” (or Sarīra)

Masīdī

九四二

佛 逝 (佛誓)

金剛智傳 (貞元錄等)

七一七

慧 日 傳 (宋高僧傳內)

八世紀半

(慧超往五天竺傳)

c. 三 佛 齊

文獻通考四裔部南

九〇四

宋 史

九六〇—一〇二八

法遇傳(統紀致九九八右、宋史四九〇二左)

九八三

嶺 外 代 答

一一七八

諸 蕃 志

同 右

元 史

明 史

咸 賓 錄

東 西 洋 考

島夷史略

星槎勝覽

西洋朝貢典錄

Sanbuza (Sarbuza)

Birtini

一〇四〇

Haraki

一一三二

Ibn Said

一二〇八—一二八六

Dimaski

一三二五

Abulfida

一二七二—一三三三

Samboja

Semboja

瓜哇古詩 Paratomm

p. 140

如上文獻に見ゆる地名のは大體に於て右の三種に歸納し得る。すなはち印度文化の延長である該王朝のそれは、又正確なる梵語の稱呼 Ceylāya を用ひしこと明かで太平寰宇記四夷傳の舍利毘逝は正さにこの音寫に外ならぬ。かくて又、すべての公文書には此れが用ひられてあるは上掲の諸碑銘によつて知られる。この Kota Kapur 碑銘とはスマトラの東南岸バンカのコタ・カプル邑に發見された古馬來語の刻文であるが、その第九節に

南海に於ける大乘王國三佛齊とその佛教文化

// *Ākavarasatita 608 diu pratidapa guklapaksa vulan vaiçakha, tatkalāṇa yau mainman sumpah*
ini. nipahat di vīlāṇa yan vala Ārivijaya kalivat manāpik yau bhūmi java tida bhaktika
Ārivijaya.//

「六〇八を經過せしシャカの年、吠舍迦月（陰曆二月にして熱季）の第十五白分の日（即十五日）の日は」
 誰かにこの咒咀が刻り付けられし日にてあり。舍利毘逝耶の軍が舍利毘逝耶の君權を認めざりし
 所の閼婆の國に對して遠征に赴くに至れるは此の同じ年なり。」

シャカ六〇八年は西紀六八六年であるから、かの太平寰宇記と共に今日吾人の測定し得る最古の
 ものであらう。Vieu Sa 碑銘及ライデン大憲章即アナイマンガラ法典は後節に叙べる所であるが、
 たゞ *Āri viṣaya* とあるはプラクリットの一型としてタミール語の訛音に過ぎない。次の師利佛逝
 は梵語が古マレイの土音に遷されて *Āri buja* (or *bujaya*) となつたもので、インドネシャの人々が
 V と唇音との區別が出来ないのは我々と同様である。そしてこれが正音と並行して文献に表はれて
 ゐる所から後世の訛でなく建國當初から存してゐたのであらう。故にアラビヤ人は之れを *Sribuza*
 と傳へてゐるが、唯困るのはセミチツク文字の常として母音のみを記してゐるから一見 *Sa. ri. ra*
 のようであるがやはりこれも上記のように還元さるべきであらう。（ケルンの提案を用ふ）又單に佛誓と
 言つてゐるのは、その首府今のバレムバン港を指したのだと思はれる。しかしロツクヒルの言へる

如く、佛逝は必ずしも此地のみを指してゐるのではなく、他の場合には亦占城の一都城である。即ち安南音では *phat-thê* でやはりインドネシアの *Bud-jaya* に當り、宋史四八九三ノ左に「清化元年新王揚陀排自稱新坐佛逝國」とあつて、今の *Bindih* で島夷史略に毘齊とあるからやはり前者と同一梵音であることが證明される (*Rockhill, Notes on the relations and trade of China with the Eastern Archipelago and the coast of Indian Ocean during the fourteenth Century, Tung-pao, vol. XVI 1915 p. 98* 參照)。

(註三)

更に三佛齊はバリ島所傳瓜哇古典バララトンに見ゆる所の *Samboja*, *Semboja* の音寫で、これは後に述ぶる如く瓜哇王 *Kertanagara* (A. D. 1268—1292) が、一二八六年此國主たる *Manivarnadeva* との政治及宗教的交渉を記した所に出てゐるもので完全なる古マレイ語である。上記宋朝の典籍は殆ど此の稱呼を用ひ、アラビヤ文献も十一世紀半以後 *Sanbuza* であるから、既にこの時代には通音となつてゐたと思はれる。尤も此の時には既に昔日の盛時に比すべくもなく、其後東瓜哇に擡頭した新王朝のため領土の大半を失ふに至つたから、三佛齊は確かに師利佛誓よりも狭いが後者よりの轉訛と見れば *Bujaya*→*Bujay*→*Boja* であるが、*Cri*→*Sam* の文法的必然を證し得ないのを遺憾とする。なほ此項に就いては考證すべき幾多の事柄を持つてゐるが他日別の題下に検索するとして唯以上の所述を左に表示するに止める。

C'rivaya	七世紀——八世紀	C'rivaya, C'ribaya
	十世紀	Sam Bujaya, S'ri Bujā
	十一世紀——十四世紀以後	S'ri Bujā, Sam Bujā, Sam Bujā

參考書

R. Brandsteter; Nata-hari oder wanderungen eines indonesische sprachforschers die Reiche der Natur, 1903, p. 32
H. H. Juybali; Kawi-Balinesch-Nederlandsch glossarium op het onduyvanausch Rāmāyana. La Haye, 1902

註一 G. Ferrand; Le K'ouen-t'ouen et les anciens navigations interocéaniques d'n les Mers du Sud, (J. As. Kleisiede t' XIV. p. 62)

W. W. Rockhill; Notes on the relations and trade of China with Eastern Archipelago and the coast of Indian Ocean during the fourteenth Century, Toiung Pao (vol XVI 1915, p. 98)

註二 此の完全なる謄本は Verspreide Geschriften VII, 1917, p. 205 の内にケルンに於て載せられてある。

註三 クロム刊本再版、五〇P—二二—三

B 地理的檢索

然らばこの國は何時頃より起り、如何程の範域を持つてゐるであらうか。元來この師利佛逝の名が出づる最古の文献は吾人の知れる限りでは義淨三藏の兩傳及百一羯磨自注である。又殆んどこれと前後して太平寰宇記、唐會要及舊唐書があつて、乃ち咸享年間(西紀六七〇—六七三)その王が唐に使

を派したことが出てゐる。そしてそれ以前には耶婆提とか(註二)法顯傳(註一)、干陀利(註二)、梁書五十四九左、陳書

三八左冊府元龜九五七ノ八右更ニ明代東西洋考十一十二ノ右とか(註三)金洲(註三)求法高僧傳致七、百一右、寄歸傳序

とかの通稱を以て呼ばれてゐたが、七世紀後半に於て突如としてその名が顯はれたことは最も注目
に價する。所がこゝに問題となるのは、スマトラ島中部 Minah Kabaw 州の内なる Pagar Ruyoi

にある梵語碑銘である。之れは五重毘訶羅を建立し、佛を供養する旨が記された所から一部の學者
から瓜哇の大建築バラ・ブドゥールに關係づけられてゐるが、若し之れを Friendrich; Verhandelings-

en van het Bataviansch Genootschap van K. enw. XXVI, 1854—57, p. 31—に考證してゐるようにシヤ

カ五七八〇西紀六五六の日附だとすると現存の最古文献となるべきも、文中の主權者 Adityavarman
が此の時存在せしを證明する他の史料無きのみか、却つて該州 Rubur Raja に残れる墓碑銘がシヤ

カ一三〇〇〇西紀一三七八前後に日附られるを以て永く疑問とされてゐたが、ケルンは竟にこの誤
讀を指摘してシヤカ一二七八〇一三五六年と斷定し、(註四)更にクロムによつて綿密な調査の結果完全な

謄本が發表さるゝに至つたからこの懸案が解決した譯である。(註五)

そこで冊府元龜一七七一四右に唐太宗貞觀十八年十二月(西紀六四四ノ終ヨリ六四五ノ初)には摩羅遊の名(註六)

で出てゐるのに二十餘年を経て突如師利佛逝の稱が用ひられ、更らに寄歸傳に「末羅遊洲即今尸利
佛逝是」とし、求法傳や百一羯磨自注には一層強く「末羅遊洲今改爲室利佛逝也」と記すに留意し

て少くとも義淨留學の以前幾許かを以て此王國の肇源としなくてはならぬと思ふ。随つて高宗咸亨年間（六七〇—六七三）遣唐使を派した曷蜜多 *Harimira* をその祖に擬し得るか、さなくとも吾人が文献によつて溫ね得る最初の王である。尤も今改と言つても地名そのものを變更したのではなくて依然末羅遊はメナム・カバウ及其附近東岸に更らにマレイ南端至る中部地方であつてパレムバムの佛逝と雙方別々に見えてゐる。故に支那印度間の海路は一般に、

- (一) 廣洲↓佛逝↓末羅遊↓羯茶^{カウチャ}↓(婆魯師^{ボロス}↓)裸人國^{ニコバル}↓耽摩立帝國^{タムラツテイ}(カンガ河口)
 (二) 廣洲↓佛逝↓末羅遊↓詹卑^{ジャムプ}↓羯茶↓那伽波亶那↓師子國

の何れかであつて羯茶以下は多少具略はあるが佛逝と末羅遊とは略々十五日行程としてゐる。このことは既にベリオも兩傳佛譯 *Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e Siècle*, (p. 324) にも考證してゐるが、予は之れを一君主か諸酋長か何れかの末羅遊の政權が師利佛逝なる新興帝國主義の國家に遷つたものであると見たい。即ちこのパレムバンはその位置よりして自ら古來東西交通の要衝であつて——法顯が印度よりの歸途寄泊した耶婆提も恐らく此地であらう——随つて早くから印度本土よりの移民多くその太守であつたシャイレンドラ家が漸次擡頭して竟に當時爲政者の羈絆を脱し、竟に之れを滅ぼしてその地位を獲得するに至つた。而して此の國の歷代君主は敬虔な佛教信者であつたことは義淨傳、金剛智傳始め諸種碑銘にて證せられる所であるが、その帝國主義

遂行上遠征と領土擴張とに専心した結果、霸威南海に振ひ随つて佛教特に大乘佛教の過速度的傳播をもたらすに至つたのである。別表に示す如く西紀六八六年中央瓜哇に遠征しマタラムに總督府を置いて之れを治めたのを始めとして、或はマレイ半島の大半を領し、たとひ一時的にせよ東南印度駐^{チヨウラ}輦^ヲを附庸國とし、又錫崙島にも軍を懸くるに至つた。^(註七)されば宋趙汝适諸蕃志上(西紀一二二五年)に^(註八)は既に十五屬國を數へてゐる程である。今ペリオの擬定によつて現地に配當してをかう。^(註九)

蓬 豐

登 牙 儂

凌 牙 斯 加

吉 蘭 丹

佛 羅 安 Poranany

日 羅 亭 Niradīnga or Niradīnga

潜 邁 不明

拔 杏 Bataka

單 馬 令 Tāmbraḷīṅga

加 羅 希 Grahi = Jaya

馬來半島東岸ニアリ

(英譯本六六P. 脚註八)

馬來半島東北岸バンドン灣南

馬來半島北岸

巴 林 馮 Palimban

新 施 Sunda 瓜哇西部

監 籠 Kampé スマトラ東岸

藍 無 里 Lamuri スマトラ北部

細 蘭 Ceylon

以上之を要するに、該王朝の勢力も時に顯晦無きにしも非ず、屬領亦叛服常ならざりしと雖も、最も盛時を以て是れを圖るに蘭領東印度諸島は固より馬來半島北岸、印度東南岸の一部、錫崙の一部に互る大國であつた。そして印度本土との絶えざる交通によつて専ら彼地の文化を移植しつゝこの大舞臺に於て恒に正法の光被を未開の人々に施した功績は燦として千古に輝くものである。實際彼等が如何に佛教徒たるを誇り、此れが傳播に意を用ひたかはマハーヴンサの記事にその一端が表されてゐる。

Purākrāmadātu (II. 1240-1275 錫崙王) の大統十一年 Jivaka (|| Zābag || Sunboja) の王はその強き軍隊を以て上陸し「我も亦眞に佛教徒なり」と言ひつゝ人民を欺けり云々 Mahivansa (CXXXIII 36-48 p.)

これは一二五五年チョーラと同盟して侵略せる時の記事であるが、その遠征の目的が一面那邊に

あつたかゝ知られると思ふ。かくて後述の如く、このシャイレンドラ家の事業は正さに孔雀朝の阿育大王、月氏の迦膩色迦王に比すべく、随つて此海上の王國も支那印度佛教交渉の上に佛教地理學上重要な役割を演じてゐると言ひ得よう。故に之れを後に起つた東瓜哇シンガサリ、及マジャパイト朝が印度教を主とし、我教を傍とした態度に對照するときまた一段と興味を覺ゆることである。

註一

耶婆提 Yavutipa 大麥即米の島にしてスマトラ（稀れに瓜哇西部）を指す印度人の稱呼である。ブトレミーは之れを *Tagos, Zygacus* とし、アラビヤ人は *Zabag* とし *Javaga* の轉訛である。後世は専ら瓜哇島に限られたるも古へは寧ろス島のことであつて、イブン、バツータ等アラビヤ人は *Zabag* と *Jaba* とに區別しヘルコ・ボロは大小の名を用ふ。詳しくは左の論文にあり。

G. Coedès ; Textes auteurs grecs et latins relatifs à l'Extrême-Orient, paris, (1910, p. 61.)

S. Lévi ; Pour l'histoire du Rāmyāya, J. As. XIe Serie, (t. XI, 1918, p. 82),

H. Kern ; Java en het Goudeland volgens de oudste berichten, 1916, p. 307 (Verspreide geschriften V.)

なほ唐杜佑通典一八八二四左 宋太平御覽七八八 一七右參照

註二

干陀利 *Kandāri*, *Kandar*, 之れに付 Gronereld ; Notes on the Malay archipelago and Malacca, (p. 185-187) に之れを *parempan* だとしたのは、梁書五十四九左 陳書三八右 冊府元龜九五七八右に南海洲上に在りとしたのを明の東西洋考十一十三右に三佛齋の古名とあるを踏襲してゐるが證據薄弱である。これはベリオも *Deux itineraries*, p. 401, no. 4 に指摘してゐるように本島の全稱であつて *parempan* もその一部に相違ないが、かの *Don Majid* の *Hawja* (原典 no. 229) に *Sinkell* (島) *Kandāri* とて本島東北岸を指す場合もある。又これはライデン大憲章の梵文部にある所の *Katāha*, *タハ* 文部 *Kidāra*, *Kadara* と同一でなければならぬ。(Archaeological survey of Southern India, vol IV ; Tamil and Skt

南海に於ける大乘王國三佛齋とその佛教文化

inscription; with some notes on village antiquities collected chiefly in the south of the Madras Presidency, S. M. Natesa Sastri, Madras, (1886, p. 205, 218 參照)。然るに高桑駒吉氏の著「大唐西域記に記せる東南印度諸國の研究」二七頁にチョーラ王なる Rajendra Chola I が西紀一〇二二年陥れた Kadara を以てヘルガル灣ヘク國の都城に比定してゐるが、これは Archeological survey of India の内 F. Hultzsch; South Indian inscriptions, (vol. II, part I.) 1891 p. 108 と及び Epigraphia Indica (vol. IX, part 5, 1908, no. 31) Thumalai rock inscription of Rajendra Chola I, p. 220-221 に出づる西紀一〇三〇に目附けられる所謂タンシヨール寺院の碑銘によられたものであらうが、予は寧ろこれをスマトラと見るのである。何となればヘルゴールのヘクとの從來の政治交渉が證せられぬし、且又 Animangala 法典即ライデン大憲章に梵語 Kāthāchhipati (ġalendravayra……ġimāravijayottungavarman とあり、タミール語も同じく Kidārat-tarayan (L. 117) Kaduātaraayan (L. 121) とあつて、このシヤレンドラ族なる該王父子は宋史四八九九左の思離味囉無尼佛麻調華と思離麻囉皮であるから、これはどうしてもスマトラとするが至當である。斤陀利も亦同地である。

註三

金洲、求法傳 致七百一頁 貞固傳に「再往室利佛逝、詩爲我良伴、其屆金洲堅梵行……既至佛逝、宿心是契」又道宏傳に「於是乎畢志南海、共金洲擬寫三藏……既至佛逝、敦心律藏」とあり。寄歸傳序に「遂使鷄貴象尊之國頓丹墀、金隣玉嶺之鄉投誠碧砌」と言へるを、解纜鈔二(佛全二一上)に今案するに此れ室利佛逝なるべし、彼洲又末維遊と名く、語勢金の義あり」とす。金の義は附會であつて既にラーマヤナに此の島を以て Suvannapaladvīpā suvarṇakaramaṇḍitam とする所から事實金は産せないけれども、印度人によつて Suvannadvīpa, suvarṇa pura と呼ばれ、アラビヤ、ラテンの文献にも黄金の豊けきを嘆へらるゝに至つた。蓋し漠然と金地と稱せらるゝものなほ他に二つあり。善見律毘婆沙二(八、九卷)に須那迦、憍多羅が派せられた金地圖であつてガイゲルは之れを緬甸南地とす。新唐書二二二ノ下 四左に驃(南緬甸)の地とするに一致す。又西域記十(帝大木一四頁)に東印度羯羅摩蘇伐剌那を出す今ヘルガル州に在り。而してターラナータ佛教史(寺本師譯本三五四頁)に金地國の名あり。耶婆を以て小乗國とせらるは誤りなるも恐らくこの金地は小乗國たる所から譯者の註釋を穩當と思ふ。けれども同じく西藏所傳阿提沙傳抄譯 Sarat Chandra das; Indian Pandits

in the land of snow, Calcutta, (1893 p. 50) のそれは佛逝であらうと思ふ。「彼れは(西紀九八〇、ネルガルに生る)金洲の高僧 Ohandrakriti 阿闍梨の許に往かんとして商船に乗じ、航行數月暴風に襲はれ幾多艱難の後金洲に達せしが、當時此の地は東方に於ける佛教の總府なり。長老 Dipankara の下に學ぶ、十二年歸路は帆船に乗じ、Tāmrādīpa (錫崙)を過ぎりて印度に返れり。」「取意」と。チャンドラ・ダスは之れなベグの Sudharmanagara 今の Tholon とするも、航程の上よりまた阿闍梨の名より更らに佛教總府とある以上、印度東海に於てスマトラ佛逝を擱いて外にない。

註四

H. Kern; Het Skt-inschrift op den gratssteen van Vorst Adityavarman te Kubur Raja, Menang Kabuali 1800 gola (Verspreide geschriften (VII. p. 215—221)

註五

Krom; Commissie in Nederlandsch-Indie voor oudheidkundig onderzoek op Java en Madoera (Oudheidkundig Verslag 1912 p. 51—52)

註六

論文 Groeneveldt; Notes on the Malay archipelago and Malacca (Toung Pao, vol II)

Ferrand; Malaka, le Malacca et Malayur (J. As. XIe et XII p. 481—483 及び XII p. 68—70) 參照

註七

文献通考四裔南部 (五八六頁)

註八

Mahāvanisa (LXXXIII 3649, LXXXVIII 62—75)

註九

Pelliot; Deux itinéraires (p. 358)

二、王名の檢索

三佛齊に關する如何なる史籍も提供されぬのは誠に遺憾である。カシュミールに於けるラージャタランギニー、錫崙に於ける大島兩史、又緬甸に於けるブツダヴンサの如きは固より瓜哇のバララ

トン、ナガラケルターガマの如きすらない。唯外部にある古文獻を涉獵して僅かに別表の如き主權者の存したるを知り得るのみであるが、或はその間百餘年の空隙あるもの、又遐至夏至等の普通名詞、末留、耶婆主、アヂ・スマトラプフリー等^(註一)の地名及びマハーラージャ等歷代通名を擧げたるものも將來必ずや完全なる王稱を以て之れに充てられることであらう。故に系譜も知る由もないが唯思離味囉無尼から室利疊華に至る數代が父子相承であることがライデ大憲章及宋史によつて知られ又 Mañibhuṣaṇavarman からして Anagarman の最後王に至る間が蘭佛學者によつて研覈されてゐる。^(註二)かくてこの世代は皆 Kāṭahādhipati cañendravarman として Mahārja の尊稱を有してゐた(ライデン大憲章及 Vien sa 碑銘)。ちねば Abulīdā, Hamāt, Dimaski 等アラビヤ人は、マハーラージャの島々とこれを固有の地名として全くスリブザの島と同一なるを述べてゐる程である。なほ此項も亦考證すべき幾多の史實があるけれども、後節佛教文化を叙べる所にて隨時之れを試みることにする。

註一 Coedès; Le royaume de grīvijaya, (p. 32) —

註二 Y. Ferrand; Relations de textes géographiques arabes, persan et turks relatifs à l'Extrême-Orient, I et II.

(外語音寫)

(正) 稱

(日附)

(西紀)

(文) 獻

1	昂 蜜 多	Harimedhas (mitra?)	咸 亨 年 間	A.D. 670—673	舊唐書南蠻傳
2	尸 利 陀 羅 拔 摩	Çindrayaaman	開元十二年八月	A.D. 724	册南元龜九六四 15左 同 九七五 4右 新唐書二二下 4右
3	劉 蔭 未 恭	Parameçvara, Jayavarman I?	開元二十九年十二月	A.D. 742	册南元龜九六五 p. 1
4	*Al-Fatihab (原語 Al-Fih)	Parameçvara Jayavarman II Çaka 724—791 (Javapatti)		A.D. 802—869 (A.D. 844—848)	{Don Hardabehi; Kitab al-masalik wal-mamalik (Leyden 刊本 13 p) 交 獻 通 考 南
	*先 留 (二 未 留)	(Malayu 王名=非ス)	天 祐 六 年	A.D. 930—932	宋 史 四九八 4左 宋 史 四八九 10左 {宋 史 大憲章 Leyden 同 大憲章
5	悉 利 胡 大 霞 里 樓	Çri Kuda Haridana, (Adhiraja?)	建 隆 年 間		
	退 乎 又 ハ 夏 池	(Aji=アノイ 諸王)	太平興國五六年		
6	思 離 華 羅 無 尼 佛	Çri Çulāmanipadamadeva	咸 平 六 年	A.D. 1003	
7	思 離 麻 羅 皮	Çri Māravi (Jayottungavarman)	大中祥符元年	A.D. 1008	
8	霞 連 蘇 送 勿 叱 蒲	Aji (=Raja) Samrabhūni	天 禧 元 年	A.D. 1017	宋 史
9	室 離 壘 華	Çri deva (次ノ王=同シ?)	天 聖 六 年	A.D. 1028	同 史
		Saṅgrāma vijayatiṅgavarman		A.D. 1030	Tanjore 寺院碑銘
10	悉 利 麻 霞 囉 蛇	Çri Mahārāja (婆クハ王名=非ス)	紹 興 二 十 六 年	A.D. 1126	宋 史
		Kamrateñ Añ Mahārāja Çrmat			Jaya Khmer 文碑銘
		Trailokyārāja Mañtibhusaṅavarman			
11		Çrmat Tribuvannan rājannulivarnadeva (Mahārājādhiraja)		A.D. 1286	不空絹索觀音銘
12		(此間 Mahārāja Padmi 女王アルス)		A.D. 1343	文殊像銘 (伯林博物館藏)
13		Ādityavarmanipratemanivarman (Çrmat çri Udayādityavarman)		A.D. 1347即位 —1378死	Pagar Ruyon 碑銘
14		Anangavarman Çailendra 家ノ最後者 (前王ノ後嗣タルハ明ナルモ即位不詳)			
	*馬 哈 刺 札 八 刺	Mahārāja Prabhu (或ハ Adityavarman?)	洪 武 三 年	A.D. 1370	明史三二四 17左
	*恒 羅 沙 那 阿	不明			同

南海に於ける大衆王國三佛齊と云の佛教文化

三、外國との交渉

(一) 支那と佛逝との交渉

(但し此項には大乘燈、大津等求法傳に出づる留學僧を始めとして慧日慧超法遇等の三藏を除き専ら政治的關係に止む。)

A 唐朝

(支那年月)

(西紀)

(王名又使者名)

(文献)

1 高宗咸享年間

六七〇—六七三

曷 蜜 多

舊唐書南蠻傳

2 中宗嗣聖十二年

六九五

唐帝使ヲ遣シ朝貢ヲ命ズ

唐會要一〇〇二十二左

3 同 十九年

七〇二

冊府元龜九七〇十八右

4 玄宗開元元年

七二三

冊府元龜九七一二右

5 玄宗開元十二年七月

七二四

使 俱 摩 羅

(同) 新唐書二二二下四右
冊府元龜九六四十五左

6 同年 八月

答禮使ヲ派ス

(新唐書二二二下四右)

7 開元十六年

冊府元龜九七一七左

8 開元二十九年十二月

七四二

劉 滕 末 恭

同 九六五一右

9 哀宗天祐元年

九〇四

先留 (未留)

文献通考南五十三丁

B 宋朝

1 太祖建隆年間

九六〇—九六一

悉利胡大霞里檀

文献通考南五十三丁

2 同 開寶四年

九七一

宋史 四八九

3 同 五年

九七二

同

4 同 七年

九七四

同

5 同 八年

九七五

同

6 太宗太平興國五年

九八〇

夏池

使蒲押陀羅

同

同 八年

九八三

遐至

同

7 雍熙二年

九八五

同

8 端拱元年

九八八

同

9 淳化三年

九九二

10 眞宗咸平六年

一〇〇三

思離味囉無尼佛麻調華

宋史 四八九九左

正使 李加排

副使 無陀李南悲

11 大中祥符元年

一〇〇八

思離麻囉皮

同

正使 李眉

地

副使 蒲婆

藍

12 天禧元年

一〇一七

霞遲蘇迷勿叱蒲迷

同

使 蒲謀

西

13 仁宗天聖六年

一〇二八

室利禳華

使 蒲押陀羅歇

副 亞加盧

14 英宗治平四年

一〇六七

同

15 神宗熙寧十年

一〇七七

使 地華伽羅

16 同元豐元—二年

一〇七八

使 羣陀畢羅

副 陀房亞里

同
文獻通考南五八六丁
宋通史考

17 同 元豐五年

一〇八二

使 皮襪、胡仙、地華加羅

宋史

18 同 六年

一〇八三

使 薩打華滿

同

副 羅悉沙文

19 哲宗紹聖年間

一〇九四—一〇九七

同

20 南宋高宗紹興二十六年一二五六

悉利麻霞囉蛇

21 孝宗淳熙五年 一二七八

同 同

C 元 朝

1 世祖至元十七年十二月一二八一

元招討使ヲ派ス

元史十一 四左及六右

2 同 十八年六月

再ビ使ヲ遣ス

同十九 一左

3 同 十九年七月 一二八二

同十二 五左

4 三十年 一二九三

同十八 四右及六左

5 成宗元貞元年 一二九五

同二一 〇五左

6 成宗大德三年 一二九九

同二〇 一右

7 同 大德五年 一三〇一

同二〇 八右

D 明 朝

1 太祖洪武三年 一三七〇

明ヨリ使ヲ遣ス

明史三二 四十七左

2 同 四年 一三七一

馬哈刺札刺ト

同

南海に於ける大乘王國三佛齊とその佛教文化

3	同	六年	一三七三	藩王恒麻沙那阿
	同	七年	一三七四	藩王馬那哈寶林邦
	同	八年	一三七五	同
	同	八年九月	一三七五	藩王僧伽烈宇蘭
	同	九年	一三七六	藩王麻那者巫里
	洪武十年			三佛齊滅亡

同史

(二) 印度との交渉

(文献に表はるゝもの)

(文献に出づる日附)

(西紀)

(事)

(件)

(文献)

1		六八九—六九二	Cakrurkiti 宣教	南海寄傳
2	唐開元五年	七一七	南天僧金剛智來錫	貞元錄十四結六、七八左 宋高僧傳 致四、七〇左
3	シャカ六〇八	七五五	Layanta 及 Adhimukti 留錫	VienSa 碑銘
4		九四三—九五五頃	錫崙ヲ征服ス	mas'udi 「金ノ原」
5	宋太平興國八年	九八三	Vimalagiri 留錫	宋史四九〇二左 佛祖統紀四二致九、九十八右

- | | | | | | |
|---------------------------------------|-------|-----------------------------|--------|---|--|
| 6 | 同 | 咸平六年 | 一〇〇三 | チヨラ征服 | ライデン大憲章 |
| 8 | チヨラ王 | Rājārāja I. | 一〇〇五 | ネガバナナ二寺ヲ延ツ
佛逝王ハ先王ノ寺ニ對シ
Ananāgola ヲ朱印地トス | 宋史四八九左
ライデン大憲章 |
| 9 | チヨラ王 | Rājendrācala | 一〇三〇 | チヨラト交戦シテ敗ラル | タンジヨール持院銘文 |
| 10 | チヨラ王 | Virājendra I ノ世 | 一〇六八 | チヨラト交戦 | Hultzsch; South-Indian
Inscriptions. (Vol. III. p. 192) |
| (文献通考南五八六丁ニハ熙寧年間一〇六八一〇七七駐輦ヲ三佛齊ノ附庸國トス) | | | | | |
| 11 | チヨラ王 | Kōvirāja-
kesaripanna ノ世 | 一〇八四頃 | 佛逝王ハ前ノ朱印地ヲ免祖
トス | Archaeological survey of
S. India. vol IV. p. 226 |
| 12 | シヤカ | 一〇一〇 | 一〇八八 | 佛逝王ハタミール語ノ公文
書ヲ發ス | Lobu Tava 碑銘 |
| 13 | セイロン王 | Parākrama | 西紀一二五五 | 錫崙征服 | mahāvamsa LXIII 39
" LXXXVIII 62 |
| (趙汝适ノ諸蕃志(西紀一二二五年)ニハ細蘭ニ佛齋ノ屬國トス) | | | | | |

(三) 馬來地方との交渉

- | | | | | | | |
|---|------------|------|-----|-----------------------|--|-----|
| | (文献ニ出ヅル日附) | (西紀) | (事) | (件) | (文) | (献) |
| 1 | シヤカ | 六〇八 | 六八六 | 瓜哇遠征 | Kota Kapur 碑銘
Vien Sa 碑銘
Grahī 碑銘
Mas'udi 「金ノ原」
Sdok kok thom 碑銘 | |
| 2 | 同 | 六九七 | 七七五 | クメル王征服
馬來半島ニ勅願寺ヲ建ツ | 劔橋大學藏尼波羅寫本 | |

南海に於ける大乘王國三佛齊とその佛教文化

3 宋 淳化三年 九九二 東瓜哇ニ敗ラル

宋史四八九十三右

4 シヤカ九二九 一〇〇七 東瓜哇ヲ征服シ王ヲ殺ス

Stein Callenfels: De verovering van Dharmavaṇṣa's kraton, (Oudheidkundig verslag) (1919 p. 156)

5 宋 寶慶元年 一二二五 此頃南海十五國ヲ屬領トス 諸蕃志上

6 シヤカ一一八六 一二六四 瓜哇ト交戦シテ敗ラル

7 シヤカ一一九六 一二七四 同

} Pararaton
(trd. by Brandes, ed Krom, p. 92)

8 シヤカ一二〇八 一二八六 瓜哇王ヨリ佛像ヲ送ラル

不空絹索觀音台座銘

9 シヤカ一二六五 一三四三 瓜哇王ノ陪臣タルノ榮ニヨリ佛寺ヲ建ツ

伯林人種學博物館藏文殊像銘

(これ恐らく Pagar ruyon 碑銘(西紀二三五六)に記す五重僧院と同じなるべし。)

10 シヤカ一二八七 一三六五 瓜哇屬國トシテ記サル

Prapaṇca; Nāgarakīrtiāgama, XIII p. 50. XLI 103p. (H. Kern 蘭譯)

11 明 洪武十年 一三七七 瓜哇ニ滅ボサル

明史三二四十八右

(四)、アラビヤとの交渉 (文献に出づるもの)

此の一項は G. Festrand, Le Ko'uen-louen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du Snd, J. As. XI^e XIV. 1919 に負ふ所多し。今人名を出して書名を略

A. P. 844—848

Ibn Ḥardādbēh

851

Sulaymān

ca. 900

Isfāk bin Imrān

902

Ibn Al-Fakih

ca. 903

Ibn Rosteh

ca. 916

Abū Zayd Ḥaran

943—955

maṣ'ūdī

ca. 1000

Al- Faris

”

(Ibrāhīm bin Waṣīf-Sah)

ca. 1030

Bīrūnī

1132

Ḥarākī

1154

Edrīsī

1224

Yakūt

南海に於ける大乘王國三佛齊とその佛教文化

1286

Ibn S'aid

1280

元使 Sulayman

1281

元使 Samsu'd-din

1273—1331

Abulfdā

ca. 1325

Dimas'ki

(以下次號)